

平山蘆江年譜稿(その二)

平山城児

本稿(その一)にもれていた記述を補足しておく。

明治四十四年(一九一三)

平山蘆江・伊藤みはる『みやこ講話 男と女』(出版社未詳)

明治四十五年・大正元年(一九一四)

平山蘆江・伊藤みはる『人情本さしむかひ』(啓業館)

平山蘆江・伊藤みはる『人情本枕もと』(啓業館)

大正五年(一九一六)

『おつくり上手』(練達堂書店)

大正九年(一九二〇)

平山蘆江・伊藤みはる『さしむかひ人情話』(博信書房)

大正十三年(一九二四)

四月、五月 「怪談会」(『新小説』) *出席者―馬場孤蝶、泉鏡

花、久保田万太郎、白井喬二、小杉未醒、長谷川伸、長田秀雄、畑

耕一、斎藤龍太郎、芥川龍之介、菊池寛、沢田撫松、それに平山蘆

江だが、蘆江は長々といくつかの怪談を語っている。そのうちの二

つは、『まじなひとえんぎ』(大6・1)にすでに活字化してあつた話である。

大正十三年(一九二四)

蘆江編著『新選都々逸』(都新聞出版局)

大正十四年(一九二五)

『唐獅子の眼』(至玄社)(?)

大正十五年・昭和元年(一九二六)

六月 「唐人船」(第六回「畜生成仏」(1)~(7))「青銅の牛」(『大衆文芸』)

衆文芸』

六月 「芝居漫談」(二)目と口(『婦人画報』)

昭和二年(一九二七)

一月 「唐人船」(『烽火岳』(1)~(6)) (『大衆文芸』)

一月 「自家探偵」(『新青年』)

一月 「竹本攝津大掾」(『講談俱樂部』)

四十六歳

一月 「芝居漫談」 帯 (『婦人画報』)

二月 「唐人船」 (『春秋』 (1)~(5)) 「爪の星」 「井上正夫氏へ」 「空

想年代記」 (『大衆文芸』)

二月 『遠出齋』 (南宗書院)

二月 「劇界二幅対」 人氣両立物 (『婦人画報』)

三月 「熊本籠城」 (1)~(5) (『騷人』)

三月 「劇界二幅対」 名人二人男 (『婦人画報』)

三月 「嘘の話」 (『大衆文芸傑作選集』 至玄社)

三月二十四日 「大衆文芸といふ名称の起因と真意に就いて」 (文

芸時報)

四月 「唐人船」 (『賤の芋環』 (1)~(6)、 『稻佐山』 (1)~(4)) (『大

衆文芸』)

四月 「熊本籠城」 (6)~(10) (『騷人』)

四月 「劇界二幅対」 東西両親玉 (『婦人画報』)

四月二十九日 『苦楽』の誌友親睦会に出席 (写真)

五月 「唐人船」 (『稻佐山』 (5)~(8)) 「春さめ」 (『大衆文芸』)

五月 「熊本籠城」 (11)~(14) (『騷人』)

五月 「劇界二幅対」 夫婦役者 (『婦人画報』)

五月十二日 「安南の暁鐘に就て」 (『文芸時評』)

六月 「唐人船」 (『ロシア更紗』 (1)~(5)) 「修羅場実説」 (『大衆

文芸』)

六月 「熊本籠城」 (15)~(18) (『騷人』)

六月 「劇界二幅対」 歌舞伎二人女形 坂東秀調と市川松蔭 (『婦人画報』)

七月 「唐人船」 (『廿日正月』 (1)~(3)) (『大衆文芸』)

七月 「劇界二幅対」 歌舞伎二元老 片岡仁左衛門と市川中車 (『婦人画報』)

人画報』)

八月~昭和三年五月 連載 「禁刀事変」 (『大正公論』)

八月 「熊本籠城」 (19)~(20) 「長崎育ち」 (『騷人』)

八月 「劇界二幅対」 沢村伝二郎と花柳章太郎 (『婦人画報』)

九月 「熊本籠城」 (21)~(24) (『騷人』)

九月 「劇界二幅対」 伊井蓉峰と河合武雄 (『婦人画報』)

十月 「西郷の鞆丸」 (『キング』)

十月 「熊本籠城」 (25)~(26) (『騷人』)

十月 「劇界二幅対」 市川猿之助と守田勘弥 (『婦人画報』)

十一月 「熊本籠城」 (27)~(30) 「爛さまし」 (『騷人』)

十一月 「東西劇界二幅対」 実川延若と喜多村緑郎 「私のいたづ

ら書き」 (『婦人画報』)

十二月 「熊本籠城」 (31)~(34) 「花柳貧話」 (『騷人』)

十二月 「東西劇界二幅対」 「若手三幅対」 (『婦人画報』)

昭和三年 (一九二八)

四十七歳

一月 「天の橋立にて」 (『旅と伝説』)

二月 「雪ごもり」 (『婦人画報』) *短篇小説。

四月 「紅丸と紫丸」 (『講談倶楽部』 春季増刊号) *大阪港

を出帆する大阪御城代の御用船。毎年関西まわりの今年米の初穂を
將軍家へ献上するために、紅色と紫色の帆を掲げた二艘の船のうち、
どちらが先に江戸に着くかを争ったという話。

五月 「藪蚊心中」(『大衆文学集』第一集、新潮社)

五月四日 「大衆文芸といふ名称の起因と真意に就いて」(『文
芸時評』 *昭2・3・24の『文芸時評』にも同じ題名の文章があ
るが?)

六月 「唐人船」(石仏(1)~(3)) (『騷人』)

七月 「唐人船」(石仏(4)~(6)) (『騷人』)

八月 「唐人船」(噂(1)~(2)) (『騷人』)

八月 「心中お玉床」(『講談倶楽部』夏季増刊号)

八月 「末期の水」*大衆小説。「私の恩人」(諸家御回答) (『婦
人画報』)

八月 「演劇七月録」(『騷人』)

九月 「唐人船」(噂(3)~(4)、小夜子(1)~(2)) (『騷人』)

九月十五日 「途伴れ道心」(『週刊朝日』)

十月 「唐人船」(小夜子(3)~(6)) (『騷人』)

十月十八日 「剣戟はどうなるか」(一) (『文芸時評』)

十一月 「唐人船」(祭のあと(1)~(2)) (『騷人』)

十一月 「結婚する人への贈物何が喜ばれるか」(アンケート)
(『婦人画報』)

十一月 「現代大衆文学全集」第二十二卷(平凡社)*「唐人船」

(天の巻)「熊本籠城」「煩惱道中記」「生残った男」「猪熊兄弟」「声」
所収。

十一月八日 「剣戟はどうなるか」(2) (『文芸時評』)

昭和四年(一九二九)

四十八歳

二月 「唐人船」(祭のあと(3)~(4)) (『騷人』)

二月 「わが家の家宝？」(アンケート) (『婦人画報』)

三月 「唐人船」(春近し(1)~(2)) (『騷人』)

三月二十四日 石岡で都々逸坊扇歌の供養が行われ、蘆江も参加。

(写真)

四月 「唐人船」(足拍子(1)~(3)) 「黒縮緬とトピー」(『騷人』)

五月 「唐人船」(足拍子(4)~(5)) 「日露開戦」(1) (『騷人』)

五月 「網代の焼打」(『大衆文学集』第二集、新潮社)

五月 「私の十年前の回顧、十年後の予想」(『文学時代』*江

戸川乱歩、西条八十、川端康成、白井喬二、平林たい子らとともに。

七月 「小唄十五章」(『騷人』)

八月 清元新曲「同行六人」(清元梅吉、節付) (『騷人』)

八月 「らくがき」(『婦人画報』)

八月 「天城山上の首」(『講談倶楽部』)

八月二(二十?)日 「裸を礼讃す(上)」(『文芸時評』*朝の銭

湯のこと。

十月 「唐人船」(地の巻) (平凡社)

十月三日 河上伸とともに長崎へ(『大阪毎日』)

十月 「名家結婚調べ」(アンケート) 『婦人画報』

十月十日 新作小唄大塚節発表会(大塚三業組合) 作詞・平山蘆江、三味線・柏伊三郎、唄・富士新蔵、振付・花柳輔蔵

十月十日 流行小唄ほつとけ節 作詞・平山蘆江、作曲・杵屋栄蔵、振付・花柳徳太郎

十月十四日 二ノ橋音頭(麻布花柳地で発表会) 作詞・平山蘆江、作曲・杵屋五三郎、振付・花柳徳太郎

* 「年譜」には、これ以外に、蘆江は「秩父音頭」も作詞したとある。

十月十四日 マキノ超特作映画「西南戦争」全20巻の招待特別試写会が椚山女学校講堂で午後六時から行われた。原作・平山蘆江、脚色・藤田潤一、監督・中島実三、西郷隆盛(東条操)、桐野利秋(小金井勝)、相良長良(河津清三郎) ほか。

十一月 「愛児の誕生記念になにをなさりましたか」(アンケート) 『スタイル』

十一月十四日 「都々逸を改め「街歌」としたい」 『函館日日新聞』

十一月十四日 「裸を礼讃す(下)」 『文芸時報』

十二月 「吉良上野の首」—ラジオ放送劇— 『騷人』

昭和五年(一九三〇)

四十九歳

一月 『明治大正実話全集』第六卷(平凡社) * 「富貴楼のお倉」「桂公のお鯉」「女将三人お金」「東西双嬌」「美人伝」「侠妓小伝」「明治六花撰」「悲恋三人女」「北廓双艶」「出世二人女」「梨園の名花」「花井お梅」「貞奴と川上」「外人の寵嬌」「吉原情話」「俠艶録の紀久八」「芸者全盛時代」所収。

一月二十二日 「思ひつき一つ二つ」 『都新聞』

五月十七日 通し狂言「日露戦争」の予告 『都新聞』

五月 「日露戦争」(脚本) * 発表誌?

五月二十七日(三十日) 戯曲「日露戦争」全十場、新橋演舞場で上演。脚本・平山蘆江。市川弘升、あるいは鈴木邦三、あるいは波崎長佐(「年譜」)が主宰の劇団独立劇場。出演者の中には、清水将夫、清川虹子らの名も見える。陸海軍が協力、途中で実写フィルムを上映。

五月 『五月雨日記』(平凡社) * 五月雨日記、禁開封、忍び三重、小品十種(十三番小吉、十五年ぶり、二十年ぶり、昔の人、金と白金、ダイヤ、あひびき物語、虫おさへ、幼な馴染み、礼まあり)、妖怪カフエ、四年目の勝負、提灯の鐘、心中花と月、京伝遊戯、乳房、人形秘話、道行と組打、比翼紋、心中博多帯、遊び、所収。

五月 「長崎の幻影」 『旅と伝説』 * ハタ揚げ、ペーロン、セーラエンなどの行事が写真入りで細かく紹介してある。

六月 文芸家協会編『大衆文学集』昭和五年版(新潮社) * 「妖怪カフエ」所収。

六月十二日 陸軍省・海軍省後援、国民新聞社主催、独立劇場へ
「ジェント」「日露戦争」全四場。脚本・平山蘆江、奏楽・陸軍戸山
学校音楽隊。日比谷公園新音楽堂に七千人の観衆がつめかけた。

六月二十七日～二十九日（おそらく、この年） 蘆江作詞「清元
六人僧」が新歌舞伎座で発表された。作曲・清元梅吉、振付・若柳
吉三郎。*清元では初の松羽目もの。

六月三十日～七月五日 マキノ特作映画「熊本城非常警報」を新
宿劇場で上映。原作・平山蘆江。南光明、小金井勝、荒井忍ら出演。

七月七日～昭和七年十二月三十一日 連載「仏性夜叉」。挿絵・
井川洗崖（『神戸日日新聞』）

八月 「木曾路の宿」（『オール読物』）

九月五日 「廿三年の新聞生活を顧みて」（一）（『新聞之新聞』）

九月十九日 都新聞社を退社。

九月十九日 「都新聞を退社、以後独立して「大衆文芸」を発刊
する」（『新聞時報』）

九月 「木内宗五郎」（脚本）全九場*掲載誌未詳。

十月九日～十一日 上海日本人倶楽部で上海演劇同好会試演によ
る「河内山と直侍」が上演された。脚本・平山蘆江。

十月 「名家楽書集」（六）（『スタイル』）

十月十五日 アンケート「サラリーマン生活をしてみて」（A）金が
溜るか？（B）（C）……の解答を諸家が寄せている。蘆江の（A）の答「決し
て溜るものでなし」（『サラリーマン』）

十月二十三日 「文壇への希望」「大衆文芸」発刊に就いて」（『文
芸時報』）

十二月 『現代大衆文学全集』続（五）平山蘆江集（平凡社）*「西
南戦争」「第二の世界」「十字架教祖」所収。

十二月頃 「所謂大衆文芸の行衛」（一）（二）（三）（『芸術新聞』）
この年 「大衆文芸」の資本金は一身受けされた一萬円 創作
道へも之れから精進」（『新聞時報』）

*明治座の食堂をあずかっていた弁竹の主人渡辺明氏が、無条件
無償で金一萬円を出資してくれた。蘆江はそれを資本にして第二次
『大衆文芸』を創刊した。（平山清郎「着流し新聞記者」原稿）

この年 「私のお茶受け」（掲載誌未詳）

*蘆江から息子や孫宛に書かれた約百通程の書簡に記された蘆江
の住所のうち、昭和五年五月二十五日から昭和十三年十月二十八日
までの分は、「牛込区富久町一―三番地」となっている。書簡はず
べて日本近代文学館へ寄贈した。

昭和六年（一九三一）

五十歳

一月 巻頭言「文芸を大衆へ」、「唐人船」（東邦亭（1）（3））、連
載「満洲」（～六月）（第二次『大衆文芸』創刊号）

一月 連載小説「お岩長屋」の予告、挿絵・千地養巢（『夕刊大
阪新聞』）

一月十五日 アンケート「時代の第一線を切らんとする青年大衆
は如何なる準備を必要とするか」特輯（B）百三十名士の回答の一つ

『サラリーマン』

一月以降 「お岩長屋」を連載 (『夕刊大阪新聞』)

一月以降 読者文芸街歌欄の選者となる。(『週刊朝日』)

「年譜」の「一月」の部分に、「読売新聞」演芸欄に演芸花柳通話「花柳にせ物語」を連載とあるが、これは「四月以降」の誤まり。

一月以降 毎号に読物連載。(陸軍省新聞班発行『つはもの』新聞)

二月四日～十二月二十三日 連載「祖国の旗」挿絵も蘆江。(『つはもの』新聞)

二月十一日 吉井勇、本山荻舟、松崎天民らとともに、灘の桜正宗醸造元山邑酒造を見学。(『大阪朝日』『大阪毎日』)

二月十二日 蘆江の述懐 (『大阪毎日』)

二月十二日 神戸市下山手通青年会館にて、吉井勇、本山荻舟、松崎天民らとともに文芸家漫談会。(『神戸新聞』)

二月十三日 色恋の道は「一押、二金、三器量」といった蘆江の談話の内容を長々と掲載。(『神戸新聞』)

三月十六日 これ以降、「街歌」の選者となる。(『神戸新聞』)

三月 「満洲」(毒血の流れ) (『大衆文芸』)

四月二日～八月十九日 「花柳にせ物語」(昔男の巻) 第百回まで連載。(『読売新聞』)

四月 「満洲」(奇遇) (『大衆文芸』)

五月 「満洲」(異郷の水) (『大衆文芸』)

五月 「大三郎小三郎」(『大衆文学集』第三卷、新潮社)

五月 (大衆文芸街)小特集「大衆文芸は何故に大衆的であるか」(『作品』)

六月 「お蘭の唇」、随筆「西銀座から」(『大衆文芸』)

六月十七日～二十三日(?) 原作・平山蘆江、脚色・鳥江鉄也による「お岩長屋」四幕八場が、新声劇により道頓堀角座で上演。

田宮伊右衛門(辻野良一)、お岩(富士野葛枝)、荒木田郡右衛門(中田正造)、伊藤喜兵衛(伊川八郎)、屑屋茂助(山口俊雄)、和歌浦糸子、金剛麗子など。(『夕刊大阪』)

六月 原作・平山蘆江、脚色・八尋不二、監督・並木鏡太郎による帝キネ映画「お岩長屋」の予告。伊右衛門(河津清三郎)、お岩(鈴木澄子)、秋山長兵衛(曾我六)、今井卯右衛門(小杉凡作)、

荒木田郡右衛門(片桐恒男)、屑屋茂助(吉頂寺)ほか。(『夕刊大阪』)

六月二十五日～二十六日(?) 「新声劇の人々」(上)(『夕刊大阪』)

六月 「芸者再吟味」(『改造』)

七月 「満洲」(置き手紙)、「元寇」(脚本) (『大衆文芸』)

七月九日 平山蘆江脚本による「元寇」、新国劇により新橋演舞場で上演。平六(島田)、民代(久松)、時宗(金井)、泰盛(金井)、義政(畑中)。(『読売新聞』)

七月二十六日～二十七日 平山蘆江作「吉備津の釜」を新興座第一回公演として帝劇で上演。市川小大夫（のちの中車）、市川錦吾、市川段猿、根岸若之助、菊岡壽郎、石山健二郎、木下録三郎、春野歌子、藤間園子、市川光江、川上壽美子ほか。

七月 「日露戦争秘話―満洲特別部隊の活躍―」（『文学時代』）

*この部隊の一員として活躍、ロシア軍に捕えられてハルビンで銃殺された横川省三少佐と沖楨介大尉のこと。

八月 座談会「大衆文学・探偵小説楽屋咄」村松梢風、甲賀三郎、直木三十五、土師清二らとともに。（『新潮』）

八月一日～？ 新声座による「お岩長屋」を神戸松竹劇場で上演。

八月四日～十一月十九日 「花柳にせ物語」昔女の巻を第六十五回まで連載。（『読売新聞』）

八月十三日 「映画になった「お岩長屋」」（『夕刊大阪』）

八月以降 帝キネ、トーキーによる「お岩長屋」（予告）

八月 「年譜」に、「経営難のため、「大衆文芸」廃刊。」とある。

八月二十六日～十二月二十三日 連載「祖国の旗」（『つはもの』）

*横浜の開港記念資料館で調べたところ、八月二十六日以前の掲載はなかった。以下、掲載のあった日付。8月26日、9月2日、9日、16日、23日、30日、10月7日、14日、21日、28日、11月4日、11日、18日、25日、12月2日、9日、16日、23日（全47回で完）

十月三日 別府亀の井にて七福神に扮した一行（写真）。毘沙門（久留島武彦）、恵比壽（平山蘆江）、福祿壽（天野雅彦）、大黒天

（長谷川伸）、壽老人（江見水蔭）、弁財天（松崎夫人）、布袋（松崎天民）、口上役（石松孝）。

十月二十一日～「十一月帰国。」（『年譜』）陸軍省新聞班囑託、「つはもの新聞」特派員として、「満洲事変」視察のため満洲（現、東北）へ渡航。

二十日午後十時五十分発神戸行特急で神戸へ。

二十三日午後神戸出帆の御用船「うるる丸」で大連へ。

二十六日正午大連入港。

三十日「ハルビン北満ホテル。夕刻、沖、横川両志士の墓に詣

づ」（『ノート』）

三十一日奉天着。

十一月一日奉天へ撫順

二日 安東↓五龍背^カ

三日 安東↓蘇家屯↓湯崗子^{タンガン}

四日 湯崗子↓營口^{インカウ}

五日 營口↓大連↓金州（『ノート』）

*十月三十日と十一月一日～五日の部分は、蘆江が残した小さな手帳（「ノート」と略称）に記してあったメモである。「訂正と補足」には詳しく内容を紹介しておいたが、本来の目的は「満洲事変を視察するというのが名目で、陸軍省新聞社囑託としての旅」であったから、遊びではなかったとしても、「心情的には、艱難辛苦の連続であった二十五年前の營口の現状を見たいというのが本音であ

つたに違いない。」(「訂正と補足」)

「あるけども昔の佛更に見当らず」「引かへして清林館に投ず
ここは元の旭ホテルなりし 大連生れの芸者と満洲を語りつつ夜に
入る」「旧知の回天堂を訪ねて第三楼のあとを知り、共益公司の家
のそのままなりし事と、酒井医院のあとの変り、果てしを見る。」(原
文横書、傍点・筆者)(ノート)

さらに、次のような街歌も記されていた。

辿り^{たど}辿れど我家は見えず袖ひく姑^{くわん} 娘の家ばかり

話の相手は大連生れ話は判らず夜が更ける

十月三十日 ハルビンでは、「名物の裸ダンス、珍活動、珍戯を

見る、猥褻もここに到れば寧ろ猥ならず」(ノート)と記してある。

ハルビンはロシアによって西欧化された町であったから、ヨーロッパ風のストリップショウでも催されていたのか。

*この年(昭和六年)の十月と十一月には、満洲国の溥儀執政が特別列車で北京から満洲へ移動し、湯岡子に宿泊したという事実があり、この蘆江の湯岡子行きとほぼ同時期であった。あるいはどこかですれ違ったかとも考えられるほど接近した時日だったような気がする。

*「長崎小唄」「江戸風長崎小唄」「長崎音頭」のいずれの作詞も蘆江で、この昭和六年中の発表か。

*「甘と辛と両方」(『漫談』)は昭和六年中の発表か。「満洲再見記」は昭和六年十一月以降の発表。「この頃から国土的気風が強

まった。」と「年譜」にある。

『軟尖春風曲』(曙書房) *『煩惱道中記』の改題。

『夫婦読本』(岡倉書房)

昭和七年(一九三二)

五十一歳

一月一日 「めつきり変った満洲人の風俗」(『つはもの新聞』)

一月一日と七月二十七日 連載「満蒙の唄」挿絵・武藤夜舟、全

30回完結。(『つはもの新聞』) 1月1日、13日、20日、27日、2月

3日、10日、17日、24日、3月2日、9日、16日、23日、30日、4

月6日、13日、20日、27日、5月4日、11日、18日、25日、6月1

日、8日、15日、22日、29日、7月5日、13日、20日、27日完。

*横浜の開港記念資料館で調査したところ、右のように連載されていたが、五月十八日と七月五日の分は現物が欠如していた。

一月三日と七月六日 連載「東叡山直訴」挿絵・千地養巢。(『神

戸新聞』夕刊) *木内宗五郎のこと。

一月 「満洲事変実地踏査座談会」(『文芸春秋』) 陸軍大将・白川義則、参謀本部少佐・遠藤三郎、貴族院議員・土岐氏らとともに、

陸軍「つはもの」特派員の資格で、民間人としてはただひとり 蘆江が加わり、大いに発言している。

二月一日 虎の門晚翠軒で帰朝歓迎会

二月 『十三対一』(春秋社) *国防小説、フアジズムの小説。

二月 「長谷川伸の片鱗」(『文芸春秋』)

三月九日 「現地に聴く」(一)(『つはもの』)

三月十六日 「現地に聴く」(二)『つはもの』

三月二十三日 「現地に聴く」(三)『つはもの』

初夏 「昭和壬申初夏」と記した色紙(架蔵)

四月十六日～六月十日 連載「銀座四丁目」挿絵・馬場射地『夕刊読売新聞』

七月 「粹人禁制手帖」(『中央公論』)

七月十九日 名古屋で大衆作家座談会。そのメンバーの長谷川伸、土師清二、松崎天民らとともに飛騨高山へ。帰途は再び名古屋へ。

八月 「吉原繁昌おぼえ書」(『中央公論』)

八月 「飛騨から佐渡へ」(『旅と伝説』)

八月 「女とうすもの泣いて明石の物語」(『スタイル』)

九月九日 矢板町ツーリング会社社長らの主催による文士座談会が紙屋旅館で催された。三宅孤軒、片桐千春、松崎天民、田中寅太郎、甲賀三郎、長谷川伸、土師清二、佐藤元吉らとともに。(『下野新聞』)

九月十日 塩原町発展策についての文士座談会。メンバーは矢板町のものと同じ。(『下野新聞』)

九月 『娘子軍先鋒』(『オール読物』)

九月二十一日 「良民から匪賊へ」(一)『つはもの』

九月二十八日 「良民から匪賊へ」(二)『つはもの』

十月 「伊井蓉峰と女(特輯実話)情熱の人伊井蓉峰」(『婦人画報』)

* 「年譜」に、「月刊「街歌」を杉原残華ら門下人と創刊。」とあるが、吉住義之助編の「しぐれ」の年表「『しぐれ』平9・12」によると、昭和八年六月、街歌『シャンス』通刊三号、同年十二月、誌名を『街歌』と改め、昭和十一年十月まで通刊28号、昭和十二年十一月、社名を「しぐれ吟社」とし、同年十一月十一日、街歌『しぐれ』創刊号、とある。

* 昭和七年～八年 「病人は僻む美しい家政婦」(花柳千夜一夜)(無署名、掲載誌未詳)

昭和八年(一九三三)

五十二歳

一月 「花柳界物語」(『婦人画報』)

一月 「異郷と、戦場と」(『書物展望』)

一月三十日 「花柳つれく草」(『読売新聞』)

二月十三日 「花柳つれく草」(『読売新聞』)

二月二十日～二十四日 名古屋松坂屋六階ホールにおいて、小波・蘆江 風流画幅展が開催された。茶がけ、半折、風炉先屏風が三円～十八円、色紙三円～五円の価格。予定五十幅のところ五十六幅の売り上げだった。(『名古屋新聞』)

二月二十七日 「花柳つれく草」(『読売新聞』)

三月一日～昭和九年一月一日 連載「善鬼悪鬼」(『満洲日報』)

三月(?) 十四日 原作・平山蘆江、脚色・山田壽夫によるレビュー化された「銀座四丁目」がカジノ・フオリーで上演された。出

演者は、石田守衛、堀井英一、佐藤久雄、松山浪子、山路照子、望

月美恵子など。

三月十五日 長谷川伸が四十七年ぶりに「臉の母」にめぐりあうという会が帝国ホテルで催され、蘆江もスピーチをした。

三月二十日 「長谷川伸を語る」(3)四十にして不惑 記者を罷め時の偉い心がけ(『報知新聞』)

三月二十七日 「芸者繁昌私案」(『読売新聞』)

三月 「移動式書齋」(『書齋』)

四月十六日〜二十四日 『京都日出新聞』『作州日報』共催による「大衆文芸講談と花形映画人の夕」が、京都烏丸夷川上ル日出会館で開催された。長谷川伸、本山荻舟、甲賀三郎、松崎天民、土師清二、竹田時彦らとともに蘆江も参加。映画人は片岡千恵蔵、伏見直江、山県直代、桂珠子など。

*その後の旅行の行程。京都嵐山―醍醐寺―仁和寺―奈良―春日奥山ドライブ―神武陵その他の諸陵―吉野山下、中、上千本―吉水院―蔵王堂―観心寺―楠妣庵―下津井の鷺羽山―岡山鳥城―後楽園―津山城趾―鶴山城―津山大釣の谿谷

四月二十一日 岡山市公会堂において、同じメンバーによる作州日報社主催の文芸講演と漫談の会

四月二十三日〜二十四日 津山新地座、対鶴楼において、作州日報主催の文芸講演と漫談の会。メンバーは岡山での会と同じ。『作州日報』

四月二十六日 「奈良の過現未」(『大阪朝日』奈良版)

四月二十七日 「脚本「誕生寺の熊谷」のための事実」(『作州日報』)

四月二十九日 「近畿の春」(『東京週報』) *四月十六日〜二十四日の講演旅行の報告。

四月三十日 「奈良から吉野へ」(『サンデー毎日』)

四月 「安東の市場で」(『新青年』)

五月十九日〜二十日 「片手剣法」(『山陽新報』)

六月 『左り棲人情』(岡倉書房) *随筆集

六月 「江戸名残三題断」(『オール読物』)

六月 街歌『シヤンス』通刊三号

七月 「名妓物語」(『現代』)

七月 『考証読物集』巻貳 平山蘆江集(岡倉書房) *「銀座の出来る話―現代人に捧ぐ」「書齋から読者へ」「揖斐川千本堤」「満洲再見記」「飛騨から佐渡へ」所収。

八月十四日〜二十日 『河北新報』『福島民報』共催の文芸座談会に参加。長谷川伸、土師清二、甲賀三郎らとともに。

十四日 鬼首、吹上間欠泉、鳴子着。十五日 鳴子で座談会。十六日 仙台北西公園公会堂で座談会。十七日〜十九日 講演会。二十日 飯坂温泉。

八月二十七日 連載長篇大衆小説「大川大八郎」についての作者の言葉(『週刊朝日』)

八月三十日 原作・平山蘆江、監督・池田義信によるサウンド版

映画「いろはにほへど」広告。栗島すみ子主演、岡譲二、飯田蝶子、吉川満子ほか。

浅草帝国館、新宿松竹館において、新舞踊「いろはにほへど」栗島すみ子振付、森赫子。(『週刊朝日』)

九月三日〜十二月十四日 連載「大川大八郎」挿絵・斎藤五百枝 (『週刊朝日』)

九月十八日 「葉桜に降る雨」(『週刊朝日』)

九月 「夕風に泛ぶ月」(『オール読物』)

九月 『続左り棲人情』(岡倉書房)

十月 『東京四季』(岡倉書房)

十月 「義剣久米の皿山」(『キング』)

十月三十日 登別温泉地獄谷で、長谷川伸、松岡俊二らと。(写真)

真)

十二月 「野分の街」(『オール読物』)

十二月 『芸者繁昌記』(岡倉書房) *随筆集。

十二月 街歌『シャンス』の誌名を『街歌』と改題。昭和十一年

十月までで通刊28号。

昭和九年(一九三四)

五十三歳

「一月、田中貢太郎、本山荻舟、甲賀三郎らとともに台湾での大衆芸講演会に出席。」と「年譜」にある。

一月十日 台湾屏東・あやめ楼にて(写真)、一月二十一日 台湾ゼーランチャ城回廊にて(写真)。一月二十四日 台湾屏東付

近サンテイモン蕃社にて(写真)。一月(?)日 台湾高雄にて、宮川次郎、沖野岩三郎、馬場孤蝶、村松梢風、永田涼風らとともに(写真)。

二月 「旅」はどこへ行く(『旅と伝説』)

二月一日 長崎文芸協会の招きで長崎行。長谷川伸、土師清二、甲賀三郎らとともに。二月二日 講演会、小唄発表会。二月三日 座談会。丸山の桃太楼で歓迎会。そのあと、蘆江のみ長居する。芥川龍之介が生前しばしば呼んだ照菊に会う。芥川が描いた河童の屏風の前で蘆江は酒を汲んだ。(『街歌』昭9・5)

三月九日 千葉県佐原伊藤忠敬の書斎の前で(写真)。

三月十日 香取神宮社前で(写真)。

五月 「長旅始末書」(続) (『街歌』)

五月 『芸者花暦』(岡倉書房) *「年譜」に。随筆集。

五月 「高千穂の神島」(『オール読物』)

七月 『蘆江怪談集』(岡倉書房)

七月 『蘆江歌集』(岡倉書房)

八月 「千人女日記の筆者」(『新青年』)

十月 「自装雑話」(『書物展望』)

十月 「旅する人たち」(『旅と伝説』)

十一月 『人間道場』(岡倉書房) *随筆集。

十一月 『新選大衆小説全集』第二十卷 平山蘆江篇(非凡閣)

*「血風呂」「一番船」所収。

十一月（推定） 「空想と実話」〔『新選大衆小説全集月報』21号〕

十二月 連載「新京、東京間」挿絵・樋口富麻呂。予告〔『夕刊大阪新聞』〕

十二月六日 名古屋にて、甲賀三郎、土師清二、辻憲一、長谷川伸らとともに（写真）。

十二月十日 下呂温泉湯の島館にて。長谷川伸、久保田四郎、土師清二、甲賀三郎とともに（写真）。

十二月 『花柳行状記』（岡倉書房）*随筆集。「花柳行状記」「花柳下半季」「花柳やりくり帖」「花柳街通信」「新橋情話」「口腹自伝」所収。

昭和九年中、原作は平山蘆江「鯨の目玉が睨む」〔『日本国民』〕、藤島一虎・脚色による戯曲『真情義剣』全六場が上演された。

昭和十年（一九三五）

五十四歳

一月 「小唄萬才楽」〔『新青年』〕

一月十一日 連載「女夫起請」の予告と作者の言葉〔『建国日本』夕刊〕。*大盗日本左衛門とその妻奴の小萬が主人公。

一月？日 連載「女夫起請」の予告〔『神戸新聞』〕

一月十九日～三十一日 台湾実業界社、実業時代社共催による「台湾大衆芸術講演会」に田中貢太郎、本山荻舟、甲賀三郎らとともに参加。十九日 基隆市公会堂、二十日 新竹市公会堂、二十一日 台中市市民会館、二十二日 台南市公会堂、二十三日 高雄公会堂、

二十四日 屏東、蕃社見学、三十一日 午後三時五分着の列車で長崎着、上野屋旅館へ投宿。往航、李王殿下と同じ船に乗り合わせ、蘆江は殿下の前で講話をした。*おそらくこの旅行中に写されたと思われる多数の写真はすべて日本近代文学館へ寄贈した。

一月 「鴛鴦荘の媼」〔『大和』和〕

二月 新作小唄「小春日」作曲・春日とよ、振付・花柳壽鐺〔『大和』

三月 「小太刀の六郎」〈仇討綺談〉〔『日の出』

四月十二日～十二月二十九日 連載「女夫起請」〔『神戸日日新聞』

四月 「私の萬年筆」〔『蒐集手帳』岡倉書房）

四月 『女人覚え帳』〔岡倉書房）*随筆集。

五月二日～十月十九日 連載「日本左衛門」〔『京都日日新聞』

六月 満洲、朝鮮行

六月二十一日 虎の門晩翠軒にて旧友会（？）（写真）

七月一日 〈なつの読物特輯〉「記者から大家へ独特の境地を行く平山蘆江出世物語」〔『新聞之新聞』

七月 「妻としてどんな女性を選ぶか(1)名士に聴く」〈アンケート〉〔『スタイル』

七月二十四日 近日連載予告『新聞人二十五年』筆者の言葉〔『新聞之新聞』

八月八日 京都街歌会小集に参加、洛西仙寿院にて（写真）

八月二十八日 〈自由型継走〉という特輯（掲載誌未詳）

○片岡我當、蘆江氏を語る 淋しがりに力と頼む只一人

○蘆江、春日とよを語る 借金を逃れて隠家で三味の音

八月 「雛鳥法界節」〔富士〕

九月 「旅の送り迎へ」〔旅と伝説〕

九月 『現代随筆全集』第十卷（金星堂）＊「戯・痴・狂・変・

奇」朗らかな話」「名・相・干支」「花柳扣ひかへ帳」所収。

九月 嬉しかったこと・楽しかったこと・口惜しかったこと・癪

に触ったこと（アンケート）〔文芸通信〕

九月 「芸者と娼妓の手練手管」〔奥の奥』373号）

九月七日 〈ここに魅力〉（10）襟脚の表情 平山蘆江氏談〔報知

新聞〕

九月十一日〜昭和十一年六月十四日 連載「海鏡」〔国民新聞〕

十月五日 軍人会館にて 永岡涼風氏とともに講演（写真）

十月 「二上り新内」〔オール読物〕＊脚本

十月 「大井川鳩六親子」〔富士』臨増号）

十一月 『三味線情趣』〔岡倉書房』＊随筆集

十一月十九日 有楽荘にて 井川洗崖とともに（写真）

十一月二十一日〜昭和十一年六月四日 連載「柿の木金助」〔名

古屋新聞〕

十二月四日 東京市内某所で、長崎商業卒の在京者同窓会へ出席

（写真）。

十二月七日 四谷小花（待合か）で。（写真）

『左り棲人情（普及版）』〔岡倉書房）

『情話集 五月雨日記』（？）

昭和十一年（一九三六）

五十五歳

一月五日 “温情巡査”と卅五年目、蘆江氏、出合ひの一幕〔名

古屋新聞〕

三月 『花柳風景』〔岡倉書房）

三月 「股旅女日記」〔富士〕

四月十一日 京城駅前で、京城明日館妓生と（写真）。十二日

京城府民館で講演。十四日 京城千代田グリルで女給たちと座談会。

十五日 京城三越で。

四月 「あの夢この夢」〔旅と伝説〕

五月 「常磐津兼太夫を講師として神田駿河台に都々逸学校を開

校。」と『年譜』にある。

五月三日 長崎通天閣にて（写真）

六月 「夢」〔蒐集手帖』岡倉書房）

七月十七日 日比谷電気クラブにて、都々逸学校第一日試演会。

長谷川伸、甲賀三郎、土師清二らとともに。

八月 「月の湯小屋」〔キング』臨増号）

十月 「芸者」〔スタイル〕

十月 「三絃音楽に対する諸家の御回答」〈アンケート）〔邦学

（楽か）研究会会報』第一号）

十月十六日 「臉のお巡りさん」(『東京朝日』)

十一月 「江州水口町の巡査」(『キング』)

「十一月四日、名古屋駅長室で滋賀県水口町に隠栖中の園川真道と三十四年目に対面。これは明治三十五年、徒歩で東海道を堺に向う途中、名古屋では胡麻の蠅に有金そっくり持ち逃げされ、鈴鹿峠では豪雨にあたりで疲れ果てて水口警察署に身を寄せた時に、ある巡査からうどん二杯と五十銭を恵まれたことがあり、その巡査の名を聞き違えたことから感謝の言葉も述べられぬがまさに三十四年を過ぎたことを、「キング」に『江州水口町の巡査』と題して随筆に書いたことからの邂逅であった。」と「年譜」にある。

十一月四日 三十五年前に「温いうどん二杯」を恵まれた蘆江はその時の巡査、園川真道(64)と再会する。(『名古屋新聞』)

名古屋大の屋旅館にて、土師清二、藤島一虎、長谷川伸、甲賀三郎、湊邦三らとともに(写真)。

十一月五日 「翌日、名宝グリルで謝恩の会を催した。長谷川伸、甲賀三郎、土師清二、藤島一虎、湊邦三のほか、大岩名古屋市長、名古屋市会議員辻寛一などが列席した。この折、都々逸学校名古屋分校が開校された。」と「年譜」にある。

十一月五日 「三十四年ぶりに」(『新愛知』)

十一月九日 名古屋三國座で(写真)

十一月 「道づれ物語」(『旅と伝説』)

十一月 「花嫁の為に」(『婦人画報』)

十一月二十八日、二十九日 大衆作家琵琶湖を周遊(『大阪毎日』)

滋賀版) 第一班(長谷川伸、甲賀三郎、竹田敏彦)、第二班(土師清二、藤島一虎、湊邦三、平山蘆江)に分れて、次のコースを巡遊。琵琶湖ホテル―白髭神社―藤樹書院―湖北大崎―月出崎―木之本地蔵―醒ヶ井―米原―東京

十二月四日 近江文芸協会主催の大衆文芸講演会。湊邦三、藤島一虎、土師清二、竹田敏彦、甲賀三郎、長谷川伸らとともに(『大阪毎日』滋賀版)

十二月 『夫婦読本』(岡倉書房)

十二月 「世帯じみずに」(『婦人画報』)

この年、帝国ホテルにて。××太夫兄弟四人会に出席(写真)。

この年、正丸峠にて、おかると(写真)。

この年、『芸者繁昌記』(普及版)(岡倉書房)

昭和十二年(一九三七)

五十六歳

一月 「東海道五十三次」(一)品川から鎌倉まで(『旅と伝説』)

一月 「あひびきトリック」(『スタイル』)

一月 「秋晴れ正丸峠」(『富士』)

二月 「東海道五十三次」(二)箱根の道づれ(『旅と伝説』)

二月 「三味線密書」(『キング』)

三月 「東海道五十三次」(三)大井川を渡る(『旅と伝説』)

三月 「いろまちめぐり」1(新橋)(『スタイル』)

三月 「春雪赤坂夜話」(『オール読物』)

- 四月 「東海道五十三次」(四)口伝長旅の秘訣(『旅と伝説』)
 四月 「いろまちめぐり」2(赤坂)(『スタイル』)
 五月 「東海道五十三次」(五)道づれ旅役者(『旅と伝説』)
 五月 「いろまちめぐり」3(浅草)(『スタイル』)
 五月 「かささぎの唄」(『オール読物』臨増号) *韓国が舞台
 六月 「いろまちめぐり」4(柳橋)(『スタイル』)
 六月 「腹切り供養」(『キング』)
 六月 『芸者の国』(岡倉書房)
 七月 「東海道五十三次」(六)三つの渡し場(『旅と伝説』)
 七月 「色町めぐり」5(神楽坂)(『スタイル』)
 七月 「怪談百度石」(『富士』)
 八月 「東海道五十三次」(七)鈴鹿峠怪談(『旅と伝説』)
 八月、「埼玉県飯能の東雲亭に滞在中、腎盂炎を病む。この頃から四谷津の守の馴染みの芸妓舟子(小林利子)との仲深まり、ゆきとの確執一層強まる。八月三日(傍点筆者)、養父浅吉死亡。」と「年譜」にあるが、「過去帳」によると、平山浅吉の死亡は八月五日で、「行年七十五歳。慈峰院仙壽日行居士」。また、蘆江は膀胱炎も併発していた(『しぐれ』昭14・3)。
- 九月 「天ヶ瀬人柱」(『キング』)
 九月 「幽霊と組打ち」(『講談倶楽部』臨増号)
 十月 「東海道五十三次」(八)水口から伏見へ(『旅と伝説』)
 十月 「鳥峠綺譚」(『講談倶楽部』)

十一月 「東海道五十三次」(九)京訛り大阪訛り、完結(『旅と伝説』)

十一月 「長唄、小唄、小曲三章」作曲・杵屋弥十郎。月にくもー。来て見ればー、わすれてもー。(『弥十郎塾報』二号)

十一月 『街歌しぐれ』の社名を「しぐれ吟社」とする。『街歌しぐれ』創刊号。

十二月 『馬賊の旗』(岡倉書房) *「馬賊清鳳洋」「黒龍江心中」「馬賊仁義」「満ソ国境」所収。

十二月(?) 「長唄を生かすー九世弥十郎君を推薦する」(『長唄丹蝶会新作初公演』チラシ)

十二月 「父慈峯院」(『香華』非凡閣、非売品) *養父法事のあとの配りもの。

昭和十三年(一九三八) 五十七歳
 一月 「道行裸祝言」(『富士』)

一月 「長唄を活かす」一名作「雪国」の歌謡化(『丹蝶会報』)
 二月 「鳥の水たき」(『スタイル』)

二月七日 茅場(町?) 借楽園にて「美人を語る座談会」長谷川時雨、川口松太郎、梅島昇、中村武羅夫らとともに(写真)

三月下旬 飯能東雲亭の敷地内に、主人横川氏の好意で、八坪ばかりの山小屋をこしらえてもらい、そこに住み、ひとり暮しを始める。城児(数え歳八歳)来る。(『しぐれ』昭14・3) *蘆江が息子や孫に出した書簡の住所が「飯能東雲亭」と記されているのは、

昭和十二年九月十一日付から昭和十八年八月十二日付までである。

四月 四月以降は全く山小屋住いとなる。

五月 一物も携えずに飯能へ(野方随筆)『住吉だより』昭27

・6)

八月 「白梅紅梅伝」(『キング』) *馬賊の話

八月 「深堀仇討始末」(『キング』) 夏増刊号)

八月 「浴衣の着こなし」についてのアンケート「腰紐はきつく」

(『スタイル』)

八月二十三日 城児(孫)来る。(『しぐれ』昭13・12)

九月 「一宿一飯」(『キング』)

九月 「名人長八」(『講談倶楽部』臨増号)

十月 「飯能戦争」(『キング』)

十二月 「恩讐三人妻」(『富士』) *満洲の話。

十二月 「街歌六首、山小屋日記」(『街歌しぐれ』) *この年から「山小屋日記」連載始まる。

昭和十四年(一九三九)

五十八歳

一月 『菩薩祭』(岡倉書房)

一月 「幫間の捕物」(『キング』)

一月 「街歌七首 日本よい国、山小屋日記」(『街歌しぐれ』)

二月 『馬賊の旗』(再版)(岡倉書房)

三月 「夢の市郎兵衛」(『キング』)

三月 「関の雲助」(『富士』)

三月 「内蔵助道中」(『講談倶楽部』)

三月 「端唄山小屋の春 山小屋日記」(『街歌しぐれ』)

四月 「不喚洞氏を憶ふ」(『書物展望』)

四月 『女一人』(天松堂)

五月 「春虹抄街歌五首 山小屋日記」(『街歌しぐれ』15輯)

六月 『続女一人』(天松堂)

八月 「沢田正二郎」(『キング』) *実話

九月 「新八郎主従」(『キング』)

十月二十七日〜三十日 城児来る。(『しぐれ』昭14・3)

十月 『長崎自讃』(長崎市教育会)

*昭和十四年十一月〜昭和十六年十月にかけて、蘆江が小泉迁外、野村無名庵、島東吾などと巻いた連句集が二冊(河合文字氏旧蔵)ある。いわゆる集印帖に墨書されていて、計十二巻の歌仙が記されている。それぞれの巻に地名の記してあるのは、三人あるいは二人でその地へ旅行しての吟かと思われる。それらすべては日本近代文学館へ寄贈した。

十一月九日〜昭和十五年三月五日 萩の巻 大阪、島東吾、小泉迁外との三吟。

十一月九日〜昭和十五年三月六日 小春の巻 京都いもぼう、島東吾、小泉迁外との三吟。

十二月二十日〜昭和十五年四月九日 年忘れの巻 大阪文楽座、島東吾、小泉迁外との三吟。

十二月 「街歌九首 山小屋日記」(『街歌しぐれ』)
昭和十五年(一九四〇) 五十九歳

一月 「仙台日記」(『街歌しぐれ』22輯)

一月十四日 仙台大寄八幡の裸まいりを体験する。

一月 「日本三景」(『旅と伝説』)

三月 「寒詣私記」(『旅と伝説』)

三月六日～七月十七日 小泉迁外との両吟、木瓜の巻 赤穂正福寺

三月十二日～七月七日 小泉迁外との両吟、五月雨の巻 天の橋

立文殊堂

四月 「余憤」(『キング』)

八月 城児来る。(『しぐれ』昭15?・10)

八月 「内蔵助道中」(『名作文庫』全八冊、博文館の内)

八月 「歌詞四首 山小屋日記」(『街歌しぐれ』28輯)

八月三日 小泉迁外との両吟、土用の巻 樞原神宮

八月十日～十月二十一日 小泉迁外との両吟、夏帯の巻

十月 「山小屋日記」(『街歌しぐれ』30輯)

十月二十一日～昭和十六年二月二十日 小泉迁外との両吟、出来

秋の巻

十月三十日～昭和十六年二月末日 小泉迁外との両吟、菊の巻

昭和十六年(一九四一)

六十歳

一月十一日 「蘆江さんを囲む会」が飯能東雲亭で催された。「第

一次の「大衆文芸」以来交友関係の続く者は、本山荻舟ただ一人であつた。」(「年譜」) 城児も参加した。「年譜」に「昭和十七年五月」に催されたとあるが誤りである。

二月二十日～七月十五日 小泉迁外との両吟、水ぬるむの巻

三月十一日～七月十五日 小泉迁外との両吟、菜の花の巻

三月十六日～十一月二十三日 連載「園公一代記」(『国民新聞』)

八月 『西南戦争』前後篇二冊(博文館)

八月 「挨拶」(『書物展望』)

八月十六日～十月二十九日 野村無名庵との両吟、定?の巻

九月 『勅使下向』(鶴書房)

九月 「山小屋日記 有朋自遠方来」(『街歌しぐれ』40輯)

十二月 『飯能随筆』(読切講談社)

昭和十七年(一九四二)

六十一歳

一月 『日本の芸談』(再版)(法木書店)

三月 「越年記—山小屋日記—」片桐千春「蘆江さんを囲む会」

(『街歌しぐれ』46輯)

五月 「細川米子の事—山小屋日記—」(『街歌しぐれ』48輯)

六月 小林利子と樺太へ旅行。二十日間。飛行機で往復。(『旅と伝説』)

と伝説』

九月 『薩摩兵児』(淡海堂出版)

十月～十一月 小林利子と朝鮮へ旅行。二十日間。金剛山見物な

ど。(『旅と伝説』)

十一月五日 五十坪もあつた田中家の墓地を整理して、新たに田中・平山両家の墓所を長崎皓臺寺に作った。また、長崎の料亭「花月」の庭に歌碑を建立。その碑面に刻んだ都々逸「端唄はるさめ丸山生れ、而も花月の花の下」

十一月八日 「道富丈吉の墓に詣ず。これはヘンドリック・ツーフの遺児なり。」*『長崎出島』の主人公がヘンドリック・ツーフである。十一月十日の作「月を浴びつつ故郷の山に我手で書いたる墓の文字」(『しぐれ』昭18・2)

十二月 『亜細亜太平記 黄龍旗』(淡海堂出版)

十二月 『飯能随筆』(読切講談社)

昭和十八年(一九四三)

六十二歳

一月 「夢を探す旅」(『旅と伝説』) *昭和十七年六月の樺太旅行、十月の朝鮮について記す。金剛山では最高峰毘盧峰で一泊した。

一月 『飯能戦争』―平山蘆江短編集―(新正堂) *名人長八、大石江戸入、島田の川越、関の雲助、三味線密書、久米の皿山、ふぐの眼玉、飯能戦争、新八郎主従、所収。

二月 『長崎出島』(婦人之家社)

二月 「祖先へ捧ぐ」(『街歌しぐれ』)

五月 『大石夫妻』(天佑書房)

六月〜七月 小林利子と満洲へ旅行。十二年ぶりに撫順炭坑へ。

(書簡昭19・6・3)

七月 神戸、大阪へ。

八月 房州で仕事。

十一月 『くろがね叢書』第十二集。「内蔵助道中」所収。

十二月 佐渡に十日間。新潟、長岡にも。

昭和十九年(一九四四)

六十三歳

三月 『随筆からふと』(婦人之家社)

四月 『しぐれ』71輯を終刊とする。

五月 陸軍の接收により山小屋を追い出される。(『住吉だより』

昭27・10)

六月二日 飯能大河原太子堂のほとりの精進堂へ移る。ここに住んでいたのは八月五日までであったことは、当時の書簡でわかる。

書簡昭19・7・8↓昭19・8・5の住所が、この太子堂となっている。この太子堂の建物の様子、そこでの生活について、蘆江が折本に毛筆で記した『池の家の歌』(河合文子氏旧蔵)がある。

*「年譜」には、「東雲亭が陸軍に接收されたため、山小屋を引きはらって東京都四谷区荒木町二十七番地(現新宿区荒木町)の小林利子氏方に移り、小林利子との同棲生活に入った。」とあるが、この太子堂の部分が抜けている。

また、当時の小林利子の住所、(A)四谷荒木町二十七口の三と(B)荒木町七の一とは同じ住宅であつて、(A)から蘆江が発信した書簡は、昭17・3・15から昭18・3・11までで、(B)からのものは、昭18・4・8から昭20・4・12までである。

十一月 「戦争と生活」(経済倶楽部講演) 東京経済新報社出版

部（非売品）

昭和二十年（一九四五）

六十四歳

四月十三日 東京を襲った米軍の空爆で、蘆江と利子は荒木町の家を焼け出される。（書簡昭20・5・3）「年譜」に「三月九日夜の米軍機による空襲のため小林利子の家焼失」（傍点・筆者）とあるのは誤りである。

この後の経過を当時の書簡の発信地でたどると、杉並区高円寺駅前、日曆奉公会（七の九一八）が昭20・4・17↓5・17で、その後が中野区野方一の七八一で、昭20・5・28↓昭28・4・14となつてゐる。「年譜」には、「五月二十四日再び焼け出されて中野区野方町の知人所有の疎開跡空屋に落ちつき、敗戦を迎えた。」とある。

昭和二十一年（一九四六）

六十五歳

二月 『しぐれ』復刊第一号。「野方日記」を連載。

七月 『ひだり棲』（二聯社）

九月 『糸みち』（二聯社）*「つめびき」の改題。

十一月 『花柳千夜一夜』（左り棲人情弔之巻）（平山蘆江著作

集刊行会）

昭和二十二年（一九四七）

六十六歳

一月 「正月芸者」（『小説と読物』）

一月 『衿おしろい』（二聯社）

四月 『春雨日記』（利根屋書店）*「春雨日記」「妖怪カフェ」

所収。

六月 「雪両吟（新連句） 蘆江と小泉迂外」（『俳句と人生』）

八月 『小説長崎物語』（民衆社）

十月 『吉原文庫』（かに書房）

十一月 『女優展望』（世界書房）*蘆江は「女優物語」を担当。

ほかに三橋章八、平山清郎との共著。

『情話集 しぐれ情話』（蒼土社）

昭和二十三年（一九四八）

六十七歳

一月 『妖怪カフェ』（利根屋書店）

*「中央線在住文筆家のつどい」を主宰する岡枝健二の発案により、蘆江作品専門店をキャッチフレーズとした住吉書店が創業され、月額二万円を最低保証の口約束で没年に至るまで、随時書き下ろし小説を刊行することになった。」と「年譜」にある。

昭和二十四年（一九四九）

六十八歳

一月 「街歌四首 おがる様移転―野方日記―」（『街歌しぐれ』

83輯）

五月 『街歌しぐれ』84輯で終刊。

六月 『日本の芸談』（和敬書房）

七月 「長崎食味」（『美しい暮しの手帖』）

十月 「きもの帖」（『美しい暮しの手帖』）

十一月 「きもの帖」その二（『美しい暮しの手帖』）

*この年、「内外タイムス」連載の「粹人^{マツ}粹筆」の執筆人メンバーの一人となった。」と「年譜」にある。国会図書館蔵のマイク

プロフィールを調査したところ、十七編を求めることができた。マイクロフィルム上で欠号になっているもの、破損している部分も多く、目下のところそれ以上を求めることはできなかった。

昭和二十五年（一九五〇）

六十九歳

*「NHKラジオ第一放送「俗曲の時間」に小唄解説を担当、没年まで継続。」と「年譜」にある。

七月 「きもの帖」その三（『美しい暮しの手帖』）

十月 「きもの帖」その四（『美しい暮しの手帖』）

十二月 「きもの帖」その五（『美しい暮しの手帖』）

昭和二十六年（一九五一）

七十歳

*『小唄と端唄集』を文雅堂書店から刊行。」と「年譜」にある。

一月 「きもの帖」その六（『美しい暮しの手帖』）

六月 「きもの帖」その七（『美しい暮しの手帖』）

七月 奇妙な熱病にかかる。（『住吉だより』昭27・6）

九月 「きもの帖」その八（『美しい暮しの手帖』）

九月二十五日 「女夫ごっこ」（粹人酔筆）（『内外タイムス』）

十月 長崎行。

十月二十三日 「続々酒客乱行」（粹人酔筆）（『内外タイムス』）

十月三十日 「再び酒客乱行」（粹人酔筆）（『内外タイムス』）

十一月十三日 「新内芸者」（粹人酔筆）（『内外タイムス』）

十一月二十七日 「困りました」（粹人酔筆）（『内外タイムス』）

十二月 「きもの帖」その九（『美しい暮しの手帖』）

十二月十八日 「乗せられた話」（粹人酔筆）（『内外タイムス』）

昭和二十七年（一九五二）

七十一歳

一月八日 「魚河岸名物男」（粹人酔筆）（『内外タイムス』）

一月十八日 「粹人訓」（粹人酔筆）（『内外タイムス』）

三月 「小説ひだり棲」（住吉書店）

三月 「野方随筆、三味線情趣、むかし話」（『住吉だより』）

四月 「小説つめびき」（住吉書店）

六月 「東京おぼえ帳」（住吉書店）

六月 「きもの帖」その十一（『美しい暮しの手帖』）

六月 「野方随筆、新伊勢物語、街歌五首、三味線情趣、むかし話」（『室町音頭』）（『住吉だより』三号）

八月 「三味線芸談」（住吉書店）

八月 「新しいせ物語」（住吉書房）

八月 「野方随筆、三味線情趣、むかし話」（『住吉だより』四号）

八月（？） 花柳徳兵衛のために「梶久恋慕」をつい先頃書いた。

（『住吉だより』昭27・8）

九月 「芸妓むかしばなし」（『笑の泉』55号）

十月 「白鷺物語」（住吉書房）

*本書の書店広告中に、既刊として、『住吉だより』（住吉書店）

が掲げている。

十一月 『長崎出島』(住吉書店)

*本書の書店広告中に、既刊として『都々逸集』(住吉書店)が掲げられている。

十一月二十六日 「さいづちあたま」(粹人酔筆)、『内外タイムス』

十二月 「きもの帖」その十一(『美しい暮しの手帖』)

十二月 『住吉だより』五号

蘆江編著『堀派小唄集』(文雅堂)

昭和二十八年(一九五三)

一月 『吉原文庫』(住吉書店)

七十二歳

*「きもの帖」その十二(『美しい暮しの手帖』(昭28・3)の文章の中に、「一昨年は下半期を肺炎と闘かった、どうやら肺炎を追拂いはしたが、あとの養生が悪くて去年は夏のかかりから肺かたるが執念深くやつて来て、到頭七ヶ月間を完全に病床にくらして、昭和二十八年は寝正月という極楽境に蟄居させられて了った。」とある。

一月十一日 「已成金綺譚」(粹人酔筆)、『内外タイムス』

一月二十二日 「老優年忘れ」(粹人酔筆)、『内外タイムス』

一月三十日 「枕のとが物語」(粹人酔筆)、『内外タイムス』

二月二十四日 「官服私用」(粹人酔筆)、『内外タイムス』

三月 「きもの帖」その十二(『美しい暮しの手帖』)

三月 『随筆日本神話 日出づる国誕生』(住吉書店)

三月 『小唄解説』(住吉書店)

三月 『野方随筆』(住吉書店)

三月五日 「沢正と泥棒」(粹人酔筆)、『内外タイムス』

三月十四日 「死神を見る」(粹人酔筆)、『内外タイムス』

三月二十四日 「火鉢と団扇」(粹人酔筆)、『内外タイムス』

四月十八日 「午前六時、結核性腸閉塞のため東京赤坂見付前田

外科病院にて死去。戒名は常修院蘆江日篤居士。遺骨は長崎市の

東光寺の田中・平山両家墓所に納め、分骨が東京目黒の五百羅漢寺

境内に、本山荻舟発企、街歌門人結社のしぐれ吟社同名義で建

立された蘆江歌碑下に納められた。」と「年譜」にあるが、「東光

寺」は「皓臺寺」の誤りである。

五月 『小唄解説』(住吉書店) *再版

五月 高谷仲「蘆江への追悼文」、『幕間』

六月 本山荻舟「詩人」、長谷川伸「平山蘆江」、『幕間』 *ど

ちらも追悼文。

六月 「きもの帖」その十三(『美しい暮しの手帖』)

九月十九日 「兎退治情話」(粹人酔筆)、『絶筆』、『内外タイムス』

ス』

十一月二十九日 午後一時より目黒五百羅漢寺において、平山蘆

江記念歌碑除幕式が街歌しぐれ吟社の発起で行われた。

第一部 挨拶・杉原残華、除幕、読経・小久江慈雲、挨拶・長谷

川伸、本山荻舟。

第二部 和歌舞・金川はる美、都々逸ぶり・松賀緑、岩井紫若、小唄ぶり・本木壽以、岩井半四郎、司会・金川文楽。参列者二百余名。

歌碑には、「このあたりいつも二人で歩いたところ思ひ出してはまはり道」が刻まれている。

昭和二十九年（一九五四） 没後一年

三月 『きもの帖』（住吉書店）

昭和三十年（一九五五） 没後二年

一月 『小唄解説』（柏屋出版部） *住吉書店版の復刊。末尾に

平山清郎「復刊に際して」

昭和三十一年（一九五六） 没後三年

『小唄集』（文雅堂）

昭和三十五年（一九六〇） 没後七年

七月 『平山蘆江編小唄集（最新版）』（東京邦楽出版社）

昭和三十八年（一九六三） 没後十年

一月 小野金次郎編『最新小唄全集』（みすじ書房） *蘆江小唄

を二十一編収録。

昭和四十年（一九六五） 没後十二年

四月 「道中昔話」（遺稿）（『これくしょん』24号）

昭和四十六年（一九七一） 没後十八年

八月 『大衆文学大系』第五卷 前田曙山・本山获舟・平山蘆江

集（講談社） *『唐人船』（「佐世保行」まで）、『熊本籠城』所収。

清原康行編「平山蘆江年譜」は本書に納められている。

昭和四十九年（一九七四） 没後二十一年

三月 「悪業地蔵」（『幻想と怪奇』60号）

八月 『現代怪奇小説集』第一卷（立風書房） *「火焰つつじ」

所収。

十月 『現代怪奇小説集』第一卷（立風書房）第二刷

昭和五十年（一九七五） 没後二十二年

三月 森治市郎編『日本舞踊曲集覧』（柏書房） *小唄ぶり「逢

いたい病いが」「梅一りん」「ぬれて見たさに」「心と心が」四編所

収。

昭和五十一年（一九七六） 没後二十三年

八月 『小唄解説』（柏屋出版部）第三版

昭和五十二年（一九七七） 没後二十四年

四月 『現代怪奇小説集』（上）（立風書房） *「火焰つつじ」所収。

昭和五十七年（一九八二） 没後二十九年

十月 『現代怪談集成』（上）（立風書房） *「大島怪談」所収。

昭和五十九年（一九八四） 没後三十一年

十月 『日本近代文学大事典』（机上版）（講談社） *「平山蘆

江」の項（平山城児）

昭和六十一年（一九八六） 没後三十三年

十二月 『忠臣蔵傑作選』（旺文社文庫） *「内蔵助道中」所収。

昭和六十二年（一九八七） 没後三十四年

十一月 『西南戦争』(全)(光風社出版) * 「西南戦争と大西郷」も収録。

昭和六十三年(一九八八)

没後三十五年

一月 『増補改訂 新潮日本文学辞典』(新潮社) * 「平山蘆江」の項(平山城児)

七月 『現代怪奇小説集』(立風書房) * 「火焰つつじ」所収。

十二月 「昭和の時代小説50篇」の中に「声」が収録。(『オール読物』 * 大西信行「蘆江さん」も収録。

平成元年(一九八九)

没後三十六年

十月 平山城児「二度と来られる世ではなし―祖父・蘆江の思い出―」(『日本及日本人』)

十一月 『忠臣蔵傑作コレクション』本伝篇(河出書房新社) * 「内蔵助道中」所収。

平成二年(一九九〇)

没後三十七年

四月 平山城児「祖父の遺稿」(『文芸家協会ニュース』 * 蘆江の連句集二冊と「池の家の歌」について。

十一月 『埼玉現代文学事典』(埼玉県高等学校国語科教育研究会発行)に、「平山蘆江」の項目(約八百字分)が見られる。

平成四年(一九九二)

没後三十九年

十月 中道風迅洞『風迅堂私選どどいつ万葉集』(徳間書店) * 「どこを切っても」「いやになつたら」「ろじのほそみち」「二十五

までは」「このあたり」以上五首収録。

平成五年(一九九三)

没後四十年

七月 『現代怪談集成』(立風書房) * 「大島怪談」所収。

十二月 『忠臣蔵コレクション』第一巻 本伝篇(河出文庫) * 「内蔵助道中」所収。

平成六年(一九九四)

没後四十一年

五月 『ふるさと文学館』第四十九巻 長崎(ぎょうせい) * 「唐人船」人船」抄(隣同士、魂迎え)所収。

六月 『日本現代文学大事典』作品篇(明治書院) * 「唐人船」の項目(平山城児) 同 人名・事項篇 * 「平山蘆江」の項目(平山城児)

この年、サントリー||松竹製作映画「怖がる人々」の挿話に、蘆江の「火焰つつじ」が原作としてとり上げられた。監督、脚本・和田誠。小林薫、黒木瞳主演。

十月 『新・ちくま文学の森』(2)奇想天外(筑摩書房) * 「火焰つつじ」所収。

平成七年(一九九五)

没後四十二年

五月 『ふるさと文学館』第十二巻 埼玉(ぎょうせい) * 「飯能戦争」,「ある日、ある日」(『飯能随筆』)所収。

平成十八年(二〇〇六)

没後五十三年

三月 平山城児「蘆江伝の訂正と補足―書簡・日記等の紹介を兼ねて―」(『国文学踏査』)

平成二十年(二〇〇八)

没後五十五年

一月 平山蘆江書簡(一) (『日本近代文学館』二二二号) *蘆江の八通の未発表書簡の紹介。

三月 平山蘆江書簡(二) (『日本近代文学館』二二二号) *蘆江の七通の未発表書簡の紹介。

平成二十一年(二〇〇九)

没後五十六年

二月 『東京おぼえ帳』(ウエッジ)

七月 東雅夫編『鏡花百物語集』(ちくま文庫) *大正十三年四月、五月の『新小説』に掲載された「怪談会」(その条参照のこと)が復刻されている。蘆江は大いに語っている。

十月 『蘆江怪談集』(ウエッジ) *妖怪七首、「お岩伊右衛門」「空家さがし」「妖怪青眉毛」「二十六夜侍」「火焰つつじ」「鈴鹿峠の雨」「天井の怪」「悪業地藏」「縛られ塚」「うら二階」「投げ丁半」「大島怪談」所収。「怪異雑記」も併載。

平成二十二年(二〇一〇)

没後五十七年

十月 「平山蘆江日記」(大正十二年八月一日〜十二月三十一日)

(『日本近代文学館年誌』資料探索⑥)

平成二十三年(二〇一一)

没後五十八年

九月 大月隆寛「平山蘆江の不思議―民俗学的知性とその身体に関する一考察」(『札幌国際大学紀要』)

平成二十四年(二〇一二)

没後五十九年

五月 坂崎重盛「蘆江本を四十冊ほど」(『日本近代文学館』二四七号)

平成二十五年(二〇一三)

没後六十年

三月 平山城児「蘆江怪談の原点」(『国文学踏査』)

出版年月未詳のものを補足しておく。

* 春日とよ編『春日小唄集』(財団法人春日会発行) (非売品)

*蘆江作の次の十四編(首)が収録されている。春日三番叟、あいたい病が―、あちらはあちらで―、梅一輪―、春日野の―、寒山寺―、ぎりのともづな―、酒の相手に―、どうした拍子か―、情もしみる―、ぬれて見たさに―、降る雪に―、ほしの、見渡せば―。

○飯能東雲亭の百畳敷の大広間に、蘆江がどどいつと鳥獣戯画風の蛙の絵を描いた幌幕があった。現物は存在しないが、その前で踊り子たちが踊っている写真が残っている(河合文子氏旧蔵)。そこに記された蘆江作のどどいつの内、判読できたものを記しておく。(ルビ、括弧内の漢字は私が宛てたものである。)

○お前子の山多峯主さとうのすごもり起きれば朝日のあさかすみ

○川は一すぢ飯能はんのでわけて入る名栗なぐりのながし船

○花ももみぢもお山のじまんいるま(入間)さやま(狭山)は茶のかほり

○たれにやらうぞ飯能はんのみやげ生絹きぎぬ白絹しろきぬをりどころ(織り所)

○わたしや飯能はんののしらきぬきぎぬ(生絹)いろ(色)はいづれに染まるやら

(その一)の誤植の訂正

- 89頁上段7行目「同前」↓「同然」
- 91頁下段22行目「〇〇〇」↓消去する
- 92頁上段1行目「二十枚」↓「二十〇〇枚」
- 92頁上段14行目「ペンネーム」↓「ペンネームも」
- 93頁上段20行目「できず」↓「できず」
- 95頁上段8行目「柴罌」↓「芝罌」
- 99頁下段7行目「兇族」↓「兇賊」
- 100頁下段20行目「三十六」↓「二十六」

ひらやまじょうじ(本学名誉教授)

付記・本年譜は平山城児先生の手書きの原稿を、博士課程修了者の石橋剛氏に依頼して、ワープロ原稿化のうえ版下を作成してもらったものである(藤井淑禎)。